

第 63 号

● 目次 ●

巻頭言 東北アジア地域研究における文化の双方向的理解	1
国際シンポジウム [Eurasian Nomadic Pastoralism:History, Culture, Environment]	2
平成 26 年度 みやぎ県民大学の開催	3
御嶽山噴火に伴う行方不明者搜索活動への協力	4
公開講演会 「川崎のほこり～ふるさとの歴史と文化～」	4
2014 年度交通史学会シンポジウム 「東北の名所－松島・塩釜のあゆみ－」	5
公開シンポジウム 「宮城発・自由民権運動再考」	5
著書紹介	6
客員紹介／新任紹介／研究員紹介	7
活動風景	8
編集後記	8

巻頭言

東北アジア地域研究における文化の双方向的理解

東北アジア研究センター長

岡 洋樹

外国研究としての東北アジア地域研究は、かつての植民地研究を淵源の一つとするが、それは一方的な他者理解のための学的営みだったと言える。しかし 21 世紀の今、地域研究は双方向的な学としてある。すなわち、我々の異文化研究と、現地研究者による自文化研究の交差、彼らの異文化理解と我々の自文化理解との交差である。東北アジア諸国の学術研究機関の研究協力が大きく進む今、自文化研究と異文化研究における地域理解の差それ自体が、地域研究の課題なのである。それが東北アジアの地域理解の現状である。

9 月から 10 月にかけて、二つのイベントに関わった。一つはロシア・ノボシビルスク国立大学で開催された日本アジア講座である。東北大学の教員がノボシビルスク国立大学人文学部で日本語を学ぶ学生を対象として日本文化を講義するこの企画は、今年で 6 年目となる。今回は、東日本大震災における津波被災地の復興における科学研究の寄与



ノボシビルスク国立大学における日本アジア講座

に関する講義と、戦後の日本映画に関する講義が行われ、また学生達による卒業研究の発表会が行われた。この講義を聴いて研究テーマを決める学生もいると聞く。

もう一つは、モンゴル国ウランバートル市で本センターとモンゴル科学アカデミー歴史研究所・中国内蒙古師範大学旅游学院、ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北

方民族問題研究所（ロシア・サハ共和国）が共催した国際シンポジウム「ユーラシアの遊牧：歴史・文化・環境」である。モンゴルの遊牧文化を今に伝えるモンゴルや中国内モンゴルの研究者に加えて、馬やトナカイの牧畜文化を継承するロシア・サハ共和国と我が国の研究者が牧畜文化の伝統を語り合ったこの会議には、我が国から 6 人の研究者が参加した。遊牧・牧畜は、日本人にとっては、まさに異文化なのであるが、実は我が国には研究の豊富な蓄積がある。彼らはそこで日本人の遊牧文化の理解に触れるわけである。

文化の発信とは、自己の文化に関する理解を一方向的に喧伝することではない。自文化の理解は、異文化の側からも解釈され、その解釈が投げ返される。そのような双方向性をどのように確保していくのが、地域研究にとって魅力的な課題なのである。



モンゴル・ウランバートル市における国際シンポジウム

最近の研究会・シンポジウム等

① 国際シンポジウム

**[Eurasian Nomadic Pastoralism:
History, Culture, Environment]**
(ユーラシアの遊牧 —歴史・文化・環境—)



経済セッションでの討議



シンポジウム開会式 (正面左からドルジ副総裁、エンフトゥヴシン総裁、チョローン歴史研究所長、ポリソフ博士、郝志成教授、岡センター長)

平成 26 年 9 月 5 日 (金)、モンゴル国ウラーンバートル市のモンゴル科学アカデミー幹部会会議室において、国際シンポジウム「ユーラシアの遊牧：歴史・文化・環境」が開催された。東北アジア研究センターでは、2000 年 8 月に締結された東北大学とモンゴル科学アカデミーとの大学間学術交流協定に基づく交流の一環として、2003 年より、ほぼ隔年で国際シンポジウムを開催している。2003 年にはアカデミー歴史研究所、2005 年は同国際研究所と、2007 年は再び歴史研究所と開催した。その後 2009 年と 2012 年に開催した国際シンポジウムにはさらに中国内モン古師範大学が共催組織として加わっている。これらのシンポジウムの報告は、いずれも東北アジア研究センターから論文集としてモンゴル語で刊行されている。本年は、東北アジア研究センター、モンゴル科学アカデミー歴史研究所、中国内モン古師範大学旅游学院、そしてロシア科学アカデミーシベリア支部人文学北方民族問題研究所 (サハ共和国) の四組織によるはじめての日・蒙・中・露の四カ国共催となった。

遊牧、あるいは牧畜は、内陸アジアで古い歴史をもつ生産の様式で、遊牧民族が歴史上極めて重要な役割を果たしてきたことは、6 世紀の突厥や、13 世紀のモンゴル帝国を見れば明らかである。近代化が進む中で、遊牧民は次第に姿を消していったが、モンゴル国や中国の内モンゴルでは今でも遊牧・半遊牧の生活が続けられている。またシベリアには、馬やトナカイを飼養して移動牧畜を営む人々が暮らしており、ロシア連邦のサハ共和国はそのような国の一つである。

今回のシンポジウムには、モンゴル国から 10 名、中国か

ら 6 名、ロシア (サハ共和国) から 5 名、日本から 6 名の研究者が参加し、歴史 2 セッション、経済 2 セッション、文化 2 セッション、環境 2 セッションの八つのセッションに分かれて報告と討論を行った。今回の会議には、モンゴル科学アカデミー総裁 B. エンフトゥヴシン博士、同副総裁 T. ドルジ博士が出席された。ドルジ副総裁による開会挨拶に続いて、エンフトゥヴシン総裁自身も「モンゴル遊牧民の牧地利用の伝統的方法」と題する研究報告を行った。中国からは、本センターが部局間学術交流協定を締結している内蒙古師範大学旅游学院長郝志成教授が文化セッションで「遊牧地区の観光業と遊牧地域の発展について」、同副院長楊巴雅爾教授が「遊牧生産からみた遊牧観光」と題する報告を行った。ロシアからはサハの人文学北方民族問題研究所のアンドリアン・ポリソフ博士が経済セッションで「チュルク・モンゴル諸民族の経済・社会・政治組織の共通形式としてのウルス」と題する報告を行った。本センターからは岡洋樹センター長が歴史セッションで「清代モンゴルにおける境界の歴史的情実再考」、高倉浩樹副センター長が環境セッションで「Arctic adaptation reconsidered: Horse-cattle pastoralism in Siberia as exception or legitimate adaptation」と題する報告を行った。ポリソフ博士によると、サハの研究者がモンゴルや内モンゴルの研究者と学術交流を行うのは初めてだとのことである。翌日は歴史研究所が準備した中央県のマンジュシリ寺院でのエクスカージョンがあり、四国の研究者が羊料理に舌鼓を打ちながら歓談した。

(岡洋樹)

② 平成26年度 みやぎ県民大学の開催

2014年9月および10月に、平成26年度みやぎ県民大学（大学開放講座）「江戸時代の宮城県を知ろう—仙台藩の歴史と文化—」（全4回）を開催した。会場は利府町生涯学習センターで、事前の応募によって55名の受講者が参加された。

今回は地域史研究をテーマとした。私たちの暮らす宮城県の江戸時代は、どのような社会だったのか。この問いかけから、宮城県の歴史について研究を深め、県民各位と一緒に考えよう、というのが主たる目的となっている。

第1回（9月25日）は、荒武賢一朗（センター准教授）から「武士と百姓・町人の関係—身分制とは何か—」というテーマで講演をおこなった。江戸時代には、かつての歴史教科書などで言われた「士農工商」の制度はなかったにせよ、ある一定の「線引き」が存在したことを述べた。また、仙台藩の財政は非常に厳しい状況があり、有力な商人や百姓たちから多額の融資を受けていた事例を紹介した。

第2回（10月2日）には、張基善氏（一関市芦東山記念館）をお招きし、演題「仙台藩儒学者・芦東山の生涯」でお話をいただいた。芦東山は、『無刑録』など多くの著作を遺した人物ながら、幽閉されるなど波瀾万丈の人生を歩んだ。江戸時代に生きた学者の足跡を、社会背景と重ねながら仙台藩の状況をご教示くださった。

澁谷悠子氏（宮城県公文書館）には第3回（10月16日）にご担当いただき、「仙台藩の蝦夷地警衛と死者供養」を論じていただいた。江戸時代の墓に関する基礎的知識から、幕末期の蝦夷地警衛に参加した仙台藩士たちの「生と死」について、わかりやすいご解説を賜った。人々の戦乱に対する向き合い方や、政治状況などを視野に入れながら、当時の社会に関する知識を獲得できたように思う。

櫻井和人氏（白石市役所）が講師を務められた第4回（10月30日）は、「片倉小十郎の城下町・白石の歴史」との題目で、都市史研究についてご披露いただいた。仙台藩領においては、数多くの「支藩」が存在したが、そのひとつ白石城には片倉氏が本拠を構え、明治維新に至るまで領主支配をおこなった。ここでは、片倉家の歴史や城下町の配置、そして文化財保全に取り組んでこられた櫻井氏の成果が発表された。

以上が各回の概要であるが、全体として3世紀にわたる仙台藩の歴史において、現在進んでいる研究を紹介した。藩財政、学者の人物像、人々の生と死、そして都市の歴史といった流れで、さまざまな視角からでありつつも、「当時の社会状況を知る」という主題でまとめることができた。全



講義の風景（10月30日）



「益岡実記」が伝える片倉家の白石入部（白石市図書館所蔵）

4回共通のキーワードとしては、教える側も、学ぶ側も次の言葉を頭に浮かべた。歴史資料に裏打ちされた「史実」ほど、おもしろいものはない。ここで得られた史実をもとに、さらなる研究の発展も期待できるだろう。

センターでは歴史資料・遺産保全の活動を推進しており、歴史や文化に関する講演会を数多く企画してきた。最近とはとくに、市民参加型の講座にたくさんの方々に参加され、積極的な学習に取り組んでおられる。今回も、ただ出席するだけではなく、講座後の質疑応答では毎回時間延長になるほどの白熱ぶりであった。熱心にお聞きくださった皆様方にとって良い「学舎」であったならば幸いである。

末筆ながら、多忙な日程のなか講師をお引き受けくださった張、澁谷、櫻井の三氏に改めて御礼を申し上げたい。また、今回は利府町教育委員会の皆様方から多大なご支援を頂戴した。講師や会場運営についても、大学と地域の連携がうまく機能し、盛会のうちに終了することができた。今後もこのような取り組みに挑戦していきたい。

（荒武賢一朗）

③ 御嶽山噴火に伴う 行方不明者捜索活動への協力

2014年9月27日の御嶽山の噴火では、山頂付近において56名の死者が確認され、7名は未だ行方不明である。10月16日まで警察・消防・自衛隊が捜索活動を行ったが、積雪などによる二次災害の危険性から今年の大規模捜索を打ち切った。

本センター資源環境科学研究分野および減災をめざした電波科学研究ユニットの佐藤源之教授は、この大規模捜索に関し警察庁へ技術供与の申し出を行った。これを受けて長野県警では、捜索活動で使用している金属探知機が火山灰中に含まれる鉱物に対し反応してしまうためうまく作動しないという問題を抱えており、東北大学に対して技術協力を要請してきた。そこで、普段の研究に用いている対人地雷検知用金属探知機の貸与による協力を行った。この金属探知機は、土壌自体による金属反応を低減する機能を備えており、御嶽山の捜索においても火山灰からの影響を受けず、登山者が身につけている金属のみを探知できる。10月15日には木曾警察署において署員への使用方法の指導を行い、研究室所有の金属探知機4台を貸与した。翌16日にはこの金属探知機を用いた捜索が行われ、行方不明者の発見には至らなかったものの、

貸与した金属探知機による捜索活動
(長野県警提供)



長野県警への金属探知機使用法の説明 (毎日新聞提供)

火山灰の影響を受けずに金属物(空き缶など)を発見することができ、貸与した金属探知機が効果的であったことが報告された。この日、本年の大規模捜索打ち切りが決定されたが、長野県警からは捜索の再開される2015年春以降に再度協力を求められている。(高橋一徳)

④ 公開講演会

「川崎のほこり～ふるさとの歴史と文化～」 (2014年7月5日)

7月5日(土)、宮城県柴田郡川崎町の川崎町山村開発センター3階ホールにて、公開講演会「川崎のほこり～ふるさとの歴史と文化～」を開催した。主催は上廣歴史資料科学研究部門・川崎町教育委員会・NPO法人宮城資料保全ネットワークである。近年川崎町で進められてきた歴史資料調査の成果をわかりやすくお伝えし、郷土の歴史について地元の皆様と共に考える機会をもちたいとの思いから、開催させていただき運びとなった。

講演では、最初に仙台市史編さん室長の菅野正道氏が「笹谷街道沿線の戦国志～砂金氏の動向を中心に～」と題して講演した。川崎は、仙台と山形を結ぶ笹谷街道の要衝であり、戦国時代にこの地域を治めた伊達家家臣の砂金氏は、付近の街道交通を押さえることで経済基盤を確立していた。その居城の前川本城は伊達政宗が最上氏との争いにおいて兵站基地として整備した可能性が見出せる、という指摘は戦国期の川崎地域の情勢について、新たな見解を提示するものであった。



講演会のようす

続いての講演では、上廣歴史資料科学研究部門の高橋陽一が「江戸時代の青根温泉一湯守佐藤仁右衛門家の古文書から一」と題し、2012年から3度にわたって行われた青根温泉佐藤仁右衛門家文書の調査成果を報告した。古文書の解読をもとに、入湯料徴収や温泉税上納、共同浴場の実態など江戸時代の青根温泉の運営状況のほか、温泉管理人の湯守を務めた佐藤家の交流関係や飢饉時の活動から、江戸時代の温泉がいかにして成り立っていたのか、その存立基盤の一端を明らかにした。

講演会当日は時折小雨の舞う天候であったが、約200名の来場者に恵まれた。足元の悪い中お越しくださり、講演をお聞きくださった皆様に心より御礼申し上げたい。また、開催に際し格別のご理解を賜り、準備にもご尽力いただいた川崎町の皆様にも深く感謝申し上げたい。(高橋陽一)

5 2014年度交通史学会シンポジウム

「東北の名所—松島・塩釜のあゆみ—」 (上廣歴史資料学研究部門共催、2014年9月20日)



討論のようす

9月20日(土)、東北大学川内北キャンパスB 200講義室にて、シンポジウム「東北の名所—松島・塩釜のあゆみ—」(交通史学会・上廣歴史資料学研究部門共催)を開催した。交通史学会が例年開催している秋のシンポジウムの企画・運営を、学会会員である上廣歴史資料学研究部門の高橋が担当して実施したものである。

シンポジウムの特色は、古代から現代に至る東北の名所の変遷を、一つの地域を対象に検証することにあった。対象とした松島・塩釜は距離的に近く、共に古代より歌枕の地として知られた名所で、江戸時代には多数の旅行者で賑わいをみせた。しかし、近代以降、鉄道の敷設や政府の国土計画が進められていく中で、両者の関係や名所としての地位に変化が生じていく。こうした名所の変遷を、東北固有の要素と交通の動向に着目し、四つの個別報告で検証することにより、名所の歴史的展開が何によっていかに規定されるのかを参加者の皆様と共に検討しようとして試みた。報告者とタイトルは以下の通りである。

- ・「中世の松島—雄島海底板碑群の紹介を中心に—」
七海雅人(東北学院大学文学部教授)
- ・「近世の松島と旅行者—名所雄島の石碑—」
高橋陽一(東北大学東北アジア研究センター助教)
- ・「宮城電気鉄道(仙石線)の敷設と沿線地域」
徳竹剛(福島大学行政政策学類准教授)
- ・「戦前・戦後の工業化構想と塩釜—港湾を中心に—」
安達宏昭(東北大学文学部教授)

学会のシンポジウムではあるが、会員以外にも公開し、当日は約160名の方々にお越しいただいた。宮城県民にとっては身近なテーマということもあり、討論では様々な立場からご意見を賜り、地域の皆様の名所に関する疑問や思いを知る良い機会となった。また、翌21日には松島・塩釜の巡見も実施し、報告内容に関する理解をより深めることができた。有意義で実りある時間を作ってくださいました参加者の皆様に深く御礼申し上げたい。(高橋陽一)

6 公開シンポジウム

「宮城発・自由民権運動再考」

上廣歴史資料学研究部門は、2014年11月30日、東北大学片平キャンパスさくらホールにおいて公開シンポジウム「宮城発・自由民権運動再考」を開催した。同シンポジウムは部門の共同研究「東北の自由民権運動」の一環として行なわれたものである。共同研究は、1970年代から1980年代にかけて一世を風靡した自由民権運動研究の再興をはかるとともに、東北の近代史の活性化をもはかるもので、シンポジウムは宮城県下の自由民権運動、さらには仙台藩士出身の民権家千葉卓三郎や彼の起草したいわゆる「五日市憲法草案」を改めて考えようという意図のもと企画された。

当日の参加者は60～70名ほど。演者・演題は以下のとおりである。

- ①千葉昌弘(北里大学元教授)
「宮城県の自由民権運動研究—その成果と課題—」
- ②新井勝紘(専修大学文学部教授)
「日本憲法史上における五日市憲法の意義」
- ③松崎稔(町田市立自由民権資料館学芸員)
「五日市学芸講談会と千葉卓三郎」
- ④後藤彰信(宮城県農業高等学校教諭)
「自由民権運動から初期社会主義へ—その接続の諸相—」



討論のようす

千葉氏は全国的な自由民権運動研究の活性化のなかで宮城県ではどのような研究成果が生み出され、何が明らかになったのか、これからの課題は何なのかを論じられた。新井氏は昨今の改憲議論を念頭におきつつ「五日市憲法草案」の今日的意義を問い、明治16(1883)年の『朝野新聞』の記事から仙台における盲人や女性による民権結社の動きを紹介された。松崎氏は、「五日市憲法草案」は五日市学芸講談会での討論をもとに千葉が起草したものという通説に再考を促し、千葉が五日市の人々に求めた議論の在り方とは何だったのか、五日市の豪農深沢権八は千葉の意を汲みかきに講談会を運営していこうとしたのかを考察された。後藤氏は、社会主義の受容のされ方の変遷、初期社会主義者の世代論を切り口に、宮城において自由民権運動の成果はいかに初期社会主義運動に受け継がれたのかを考察された。

講演終了後に設けられた討論の席では、演者とフロアとの間、さらには演者間で活発な質疑が交わされ、潜在的には依然自由民権運動への関心が高いことをうかがわせた。

(友田昌宏)



社会主義社会の経験

—モンゴル人女性たちの語りから—

トゥルムフ オドントヤ著
東北大学出版会
2014年8月

本書では、モンゴルで1924年から約70年間にわたって維持されてきた「社会主義モンゴル社会」は、女性たちにとってどのような社会であったのか、女性たちはこの社会をどう生きてきたのか、この社会を生きることはどんな文化社会的経験であったのか、女性の役割分業の側面から取り上げ、検討した。つまり社会主義社会を経験した当事者女性たちの個々の語りや当時に発行されていた婦人誌などを分析し、国家が規定し、社会が要求した「理想」の女性像を描くとともに、社会主義政策とそれに対応した女性たちの対応、また国家経済システムの変化に伴う女性の役割分業の変遷を探りながら、女性たちが置かれた社会主義モンゴル社会の状況を明確にした。そして女性たちは過去の社会文化的経験に関してどのように評価し、どのような思いを抱いていたのかをも検討し、女性たちにとっての「社会主義モンゴル」の実像を総括的に考察した。



清朝宮廷演劇文化の研究

磯部彰編
勉誠出版
2014年2月

本書は、特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」の成果報告書の一つであり、日本学術振興会研究成果公開促進費の助成を受けた出版物である。

本書の出版目的は、清朝の宮廷作品である連台大戯や節戯などの演劇作品を中心にした、宮廷文化の特色を明らかにすることにある。

内容は、二部仕立てで構成される。第1部は、連台大戯と呼ばれる宮廷演劇の作品研究、儀典戯に属す節戯や宴戯寿戯の各作品研究を収録する。主として、宮廷演劇の劇本研究に焦点を当て、宮廷儀式と主催した皇帝各世代との関係、テキスト問題の分析を論ずる。

第2部は、宮廷演劇を取り巻く清朝体制、及び宮廷文化の文化遺産に関する研究内容から成る。ここでは、「大清グルン」が宮廷演劇をいかに利用し、統治にとってどのような効用を持ったか、或は、宮廷戯曲などの資料が、民国期・共和国時代初期にすぐに出版された背景についての政治史的な面からの研究成果を収める。



湯けむり復興計画

江戸時代の飢饉を乗り越える

高橋陽一著
蕃山房
2014年7月

本書は、被災地の歴史を記憶にとどめるべく、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークによって企画された『よみがえるふるさとの歴史』シリーズの第4巻である。人的被害の観点からみた場合、江戸時代最大の災害は飢饉であり、1780年代の天明飢饉では東北地方全体で約30万人の死者が出たと推定されている。東北地方は温泉地として名高いが、どこか牧歌的にみえる温泉の歴史もまた災害と無縁ではなく、飢饉によりコミュニティ崩壊の危機に瀕することとなった。だが、温泉で暮らす人々は長期的視野に立って温泉を活用した復興計画を立案し、本格的な地域の再生に挑んでいく。それは、現在の温泉の発展にもつながる、当時としては画期的なものであった。本書では、仙台藩領内の秋保温泉・川渡温泉・青根温泉を取り上げ、江戸時代の人々の、いわば生存をかけた温泉利用の取り組みを紹介する。



水・雪・氷のフォークロア

北の人々の伝承世界

山田仁史・永山ゆかり・藤原潤子編
勉誠出版
2014年3月

私は仙台で生まれ育ったくせにスキーやスケートが苦手だが、雪だるま作りや雪合戦は冬の遊びの定番だった。氷柱を折り、霜柱を踏んで学校へ通うのも楽しかった。東北アジアの人々も、雪や氷に包まれた冬を体験してきたから、関連する言い伝えを集めてみたら面白いのでは——こうして出来上がったのが本書である。とくに前半では言語や音楽を専門とする研究者が、少数民族のもとでじかに集めた単語や諺、物語や歌詞などを紹介している。はしがきで私はアンデルセンの『雪の女王』に言及した。この童話にインスピレーションを得たディズニー映画『アナと雪の女王』が今年、全世界の多様な言語に訳され、人気を博している。雪や氷はすでに北の人々の専売特許ではなくなったが、あくまでスクリーン上での話だ。台湾や沖縄から東北大に来た学生たちは、初めて見る雪景色に歓喜する。やはり現場の力は健在だ。現地を歩いてきた執筆陣から、その迫力を感じとってほしい。

(山田仁史)





●客員教授
バドマオツサル
(巴達瑪敖德斯爾)

2014年10月1日、中国内モンゴル大学のバドマオツサル教授が客員教授として着任されました。

バドマオツサル教授は、内モンゴルのナイマン旗出身のモンゴル族で、1965年生まれ。2003年に内モンゴル大学で「機械翻訳における中国語・モンゴル語 Phrase 転換規則についての研究」と題する博士論文で学位を取得されました。専門は社会言語学、モンゴル語文法、モンゴル語教育で、都市化の影響下におけるモンゴル語とモンゴル文字の使用状況、モンゴル語方言の記録・保存と復興、モンゴル語の人名の漢字転写とローマ字転写標準案の作成等の研究

に携わっています。

バドマオツサル教授は2003年から内モンゴル大学のモンゴル学学院モンゴル言語・文字研究所の所長を務め、大学や学院が主催する言語学、モンゴル学、アルタイ学、都市言語調査等に関する国内・国際学術シンポジウムの組織運営の業務に関わってきました。

今回、客員教授として2015年1月までの4ヶ月間の滞在期間中、「内モンゴルにおけるモンゴル語の社会言語学的研究」を行うほか、「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」の活動に参加します。

(栗林 均)



●教育研究支援者
ハイ・セチンゴアー
(海・斯琴高娃)

本年11月1日から「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」の教育研究支援者として勤めています。

中国内モンゴル自治区バヤンノール市出身で、2007年に内モンゴル大学を卒業し、同年、昭和女子大学の「アジア隣近諸国の女性指導者育成を目的とした、アジア国際交流留学生奨学金」によって来日しました。2008年から昭和女子大学の科目等履修生、同大学の大学院福祉社会研究専攻の博士前期課程、生活機構学専攻の博士後期課程に学び2014年に修了しました。大学院在学時代から現在まで、主に19世紀のモンゴル人作家インジャンナシ (Injannasi) の作品にお

ける語彙をモンゴル語近代語彙形成の視点から研究しています。

私たちが使っていることばは歴史、社会、政治、生活習慣など様々な影響を受けながら変容しており、また、ことばの変容により歴史、社会、政治、生活習慣が変わってゆきます。こうした観点からモンゴル語語彙における近代的な変容について研究を進めています。

日本に来て、6年経ち、日本の文化、習慣、精神に大いに感動してきました。日本の文化に触れ合うことを希望して2年前から山田流箏曲を学び始めました。素敵な日本古典曲を含んだ箏曲に癒されています。どうぞよろしくお願いいたします。



●フルブライト米国人招聘講師
マガリー・コッホ

私は2014年9月より米国の日米教育委員会フルブライト交流プログラムによるフルブライト講師として東北アジア研究センターに10ヶ月滞在します。2012年に佐藤源之教授のお招きで客員准教授として本センターに滞在したことがきっかけとなり、今回の滞りを申請しました。2年前の滞りでは佐藤研究室が開発したレーダー技術が私の専門である乾燥地域の水理学と地理学に応用できる可能性について多くを学びました。砂漠地帯の有限な水は地球温暖化により十分な復元ができなくなっています。他方乾燥地域では、急速な人口増加により農業灌漑のため大量の水を必要とするようになってきました。地下水や化石

エネルギー、再生可能エネルギーの探査や農業に適した土壌を捜すことは、これらの地域での優先事項です。そして衛星リモートセンシング技術が役立つと思います。今回の滞りの機会は光学及びマイクロ波リモートセンシングを併用した地下水探査の研究を推進するための絶好の機会だと思っています。また私は同時に東北大学環境科学研究所において2014年後期と2015年前期に「マルチスペクトル・リモートセンシング入門」という講義を開講します。今後自分の本務地であるボストン大学リモートセンシングセンターと東北大学との間に国際的かつ学際的な共同研究の構築と拡大していきたいと考えています。



●産学官連携研究員
木村 一貴

2014年9月に東北アジア研究センター地域生態系研究分野の千葉研究室に産学官連携研究員として着任しました。私の専門は進化生態学・保全生態学であり、大学院・ポスドク時代を通して、生物がいかんして多様化してきたのか・他の生物とどのような関係性を築いており生態系の中でどのような役割を担っているのか、といった事柄に関して研究を行ってきました。主な研究対象として、日本国内に800種以上も分布しているカタツムリや潮間帯生態系で重要な役割を果たしている巻貝類が挙げられます。近年特に注力しているのは、絶滅の危機に瀕した小

笠原諸島固有のカタツムリ類の系統維持や、沖縄地方・本州に移入した外来種が在来の生態系にもたらした変化と生態系の回復に関する研究です。後者に関しては、日本とロシアの共通外来種についての研究もロシアの共同研究者とともに進めています。現在は個別の生物種に着目した形で取り組んでいますが、今後はこれまでの経験を活かしつつ、東北アジア地域の生物相という、より広い視野での生態系の保全に貢献可能な研究を進めていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

活動
風景

地殻変動解明の未開の地、根室半島～歯舞群島

東北アジア研究センター准教授 平野 直人

東北アジアは現在、環太平洋地域の北西部に位置し、特に海に面した地域は激しい地殻変動にさらされています。アリューシャン諸島～カムチャツカ半島～千島列島～日本列島～伊豆小笠原諸島といった火山性の弧状列島が連なり、巨大地震も活発な地域です。はるか昔からこうした地殻変動にさらされてきた東北アジアの大地には、過去の様々な地史が記録されています。たとえば、カムチャツカ半島には遠くハワイ諸島から連なる直径数百キロメートル級の巨大な海山の列が衝突していますし、千島列島から連なる火山列は、北海道東部に西進して衝突し、現在の日高山脈を作りました。この日高山脈はおよそ1億5千万年前の深海底の地層や岩石が分布している特異な場所ですが、その地質はサハリンまで連続しています。

研究室では、この激しい地殻変動のなかで、いまだ形成過程が解明されていない「根室層群」の調査を行っています。根室層群は、道東の根室半島・浜中町から歯舞群島にかけて分布する7千万年前から6千万年前の地層です。現在の位置は、千島列島から知床半島、摩周湖や屈斜路湖にかけて連なる千島火山弧の南部海側に位置し（図1）、堆積当時の古千島列島衝突前から同じ堆積場にあったと言われています。

一般に、「火山弧」とその火山弧を作り出す海洋プレート

の沈み込みの現場である「海溝」との間の地域は、火山弧に対して「前弧域」と呼ばれ、陸側からの

堆積物が供給される場所であり、沈み込んだプレートがまだ冷たく浅い場所にあるため、火山活動やマグマ活動は発生しません（図1）。しかしこの根室層群は前弧域でありながらマグマの貫入や海底噴出溶岩があり、さらにその化学組成も特異です。世界中の前弧域でこのような例はほかにありません。この不思議なマグマの成因を解明しようと、岩石記載や化学組成分析、地質調査を進めています（写真1）。また、今となっては近くて遠い歯舞群島・色丹島の岩石試料や地質資料の行方を追うため、北海道大学総合博物館や産業技術総合研究所にも協力を仰ぎ進めています。

歯舞群島と根室半島は、知床半島や国後島、択捉島とは異なり、高い山地が全く無く、その地形の平坦さが特徴です。根室層群に分布するマグマの貫入岩類はこれら地域の海岸沿いに露出し、周囲の堆積岩より固いため、このマグマ貫入岩の存在が根室半島と歯舞諸島を陸化させているとも考えられます。有名な観光地である納沙布岬灯台の下には、アルカリマグマの貫入の様子が詳細に観察できる場所がありますし（写真2）、国指定天然記念物の根室車石は、深海底に噴出した溶岩の特異な形態を見ることが出来る絶好の場所でもあり、地質学が専門でない方でも楽しめる場所です。



写真1 浜中町仙鳳趾海岸での地質調査の様子。崖上部の貫入岩と堆積岩（下部）。

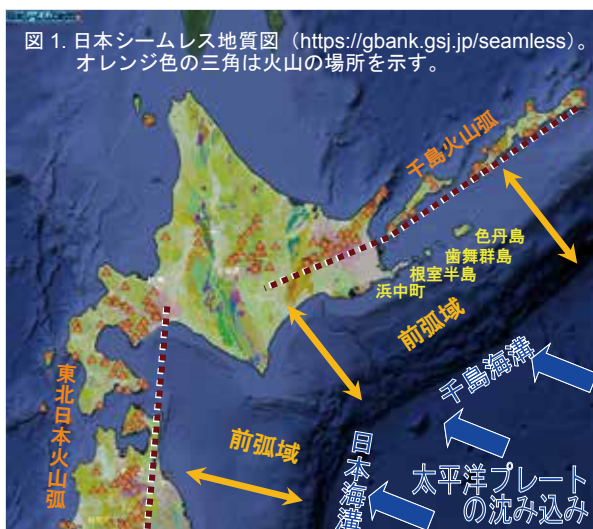


図1. 日本シームレス地質図 (https://gbank.gsj.jp/seamless)。オレンジ色の三角は火山の場所を示す。



写真2 納沙布岬灯台遠景。水平線上には、歯舞群島が見える。

編
集
後
記

9月に学会と上廣部門の共催でシンポジウムを企画しました。盛況のうちに終えたのですが、学会からの参加者は全体の2割に満たず、一般の参加者に助けられた形となりました。歴史系の学会では会員不足などが頻りに叫ばれていますが、一般の方々との接点をより多く持つことにより、解消される問題もあるのではないかと思います。今年も残り僅かとなりました。皆様良いお年をお迎えください。（高橋陽一）

東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター 第63号 2014年12月24日発行

編集 東北アジア研究センター広報情報委員会

発行 東北大学東北アジア研究センター 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41

TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010 http://www.cneas.tohoku.ac.jp/



植物油インキを使用し、環境にやさしい水なし印刷方式を採用しています。